チリ・パタゴニア1968-69 ──ある学生探検の記録 第4回

「きょうと」号の遭難

フィヨルド偵察行と無人島への漂着

安成哲三 やすなり てつぞう
名古屋大学地球水循環研究センター(気象学・気候学，地球環境学)

イラスト＝安成 晶

この連載は，現在の私ではなく，35年前に学生だった私の書いた記録である．当時，京都大学探検部に所属する学生であった私は，仲間の2人と南米チリ・パタゴニアの探検を思い立ち，そして2年近くを費やして1968年にようやく実現した．帰国後，私はその探検の報告を約半年かけて書き上げた．内容は，探検の思い立ちから帰国まで，私たちは何をやり，何を見聞きし，そして何を考えたかを，あくまで私自身を通して記したものであるが，いくつかの不運が重なり，結局，35年間眠り続けることになってしまった．今回，1960年代末の学生による「探検」の記録として，ほとんどそのまま『科学』に，十数回に分割して掲載されることになった．

前回(6月号)は，チリ北部に鉱石運搬船で到着し，首都サンチャゴで全員合流して，チリ海軍の輸送艦で南部のパタゴニア諸島部の観測所プエルトエデンに着くまでの部分を報告した．大量の荷物とともにチリ・パタゴニア諸島部に行くには，現地の物資輸送や補給に行く海軍の船に便乗させてもらうしかないとの情報を得ていたが，その交渉は当初，ほとんど望み薄であった．しかし，チリ政府とチリ人の日本びいきと寺本副隊長の機転に助けられて，便乗は可能となった．現地での基地となったプエルト・エデンからさっそく，日本から持参した小型のモーターボート「きょうと」号による氷河地域への偵察行を試みたが，今回は，その顛末について報告する．

「きょうと」号による偵察行

ぼくたちの計画は，日本でたてた日程より大分遅れていた．予定では，もう氷河上で調査活動をやっているはずだった．プエルト・エデンへの船があまりないので，遅れたのは仕方のないことだ．それより，ぼくたちは，調査対象としていたピオ11世氷河へ取りつくことはかなり困難だろうと，その付近を数年前通ったチリの登山家ガルシア氏からきいていた．ピオ11世氷河は，チリ・パタゴニアで最も大きいフィヨルド，エイレ・フィヨルドの奥にある，長さ約30 km平均幅5 kmの氷河である(図1)．チリ側では最も大きな氷河のひとつであり，もちろんまだ誰も足を踏み入れていない．単に氷河と気象の調査だけなら，他の氷河でもいいのだが，ぼくたち学生の探検には，一種のロマンティシズムが調査に先行する．地図や航空写真を手に入れて検討し，取りつきもまず大丈夫だろうと思っていた．が，ガルシア氏が，エイレ・フィヨルドに入った時は，氷河が10 km近くも海に，しかもフィヨルドの幅いっぱいに押し出ていたという．とにかく偵察が必要である．

12月18日．井上治郎(あだ名「ジロー」)，井上民二(あだ名「ブンヤ」)，ぼくと水先案内人として雇ったアラカルーフの男，ホセ・トンコは，ぼくたちのボート「きょうと」号にのりこんだ．

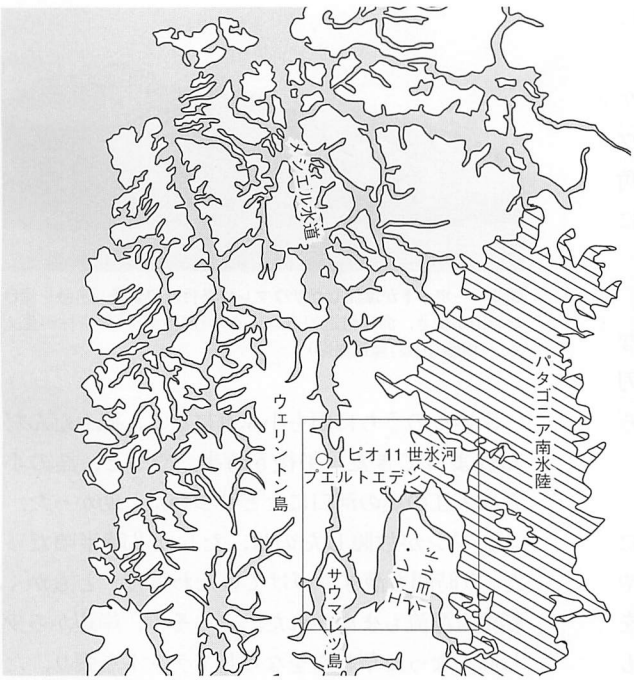


図1――チリ・プエルトエデン付近．右上の図は，左図の四角い枠の部分の拡大図．予定では，ピオ11世氷河まで偵察に行くはずだった．

くもり時々にわか雨．多少風波がある．快調にスタート，とおもったとたん，突然エンスト．冷却水が上がらず，もうオーバーヒートだ．おかしい．岸から見ていた他の隊員や空軍の人がボートでかけつける．が，すぐ調子をもどす．心配気なかけつけ組をよそに再びスタート．「どうちゅうことないやろ」．

またたくまにエデンの入江をあとにして，幅5 kmほどで続くメシエル水道にはいった．時々，逆波をフロントガラスにうけ，一瞬前方が見えなくなる．水道を横断し，対岸(大陸側)ぞいに南下する．両岸はびっしりとコイウエ(南極ブナ)がはえている．下生えにはばかでかいシダ類が多い．岸近くの静かな水辺には，時おり，白やまだら模様の鴨が遊んでいる．両岸は1000 m前後の高さで山がつらなっており，氷蝕をうけて，全体にのぺっとしている．上部は露岩で，ところどころ残雪が見え，その付近から，海辺まで，白い糸のように斜面をはいながら，滝がおちている光景にあちこちでぶつかる．日本で一番高い那智の滝は高さ100 mというが，この付近の滝はその比でない．山頂付近から何百mとなく海まで続いている．

小さな島の間の細い水路をぬけ，小さなフィヨルドへ少し入ったところでエンジンをとめ，一休みする．波はない．ボートの船体にあたるチャプチャプという水の音が快い．きゅうくつな船内で昼食をとっていると，外でバシャンという音がした．あざらし(現地の人はロボといっている)だ．悠々ともぐったり頭を出したりしている．チリ南部諸島一帯は，あざらしの多いところでもある．

ふたたびもとのメシエル水道にのりだす．水道へ入ると，やはり波をかぶる．メシエル水道は，ウェリントン島と大陸の間を南北に走り，マジェラン海峡へと続いている．チリ・パタゴニアは，南極のまわりを吹きまくる，周極偏西風がまともにぶつかる，唯一の陸地だ．オーストラリアもアフリカも，もっと低緯度に南端があるからだ．世界最悪天候地帯といわれる由縁もこの偏西風にある．そんなところで海が荒れたらえらいことになるだろう．こんなちっぽけなボートで大丈夫だろうか．日本ではつねにこの未知数への不安があった．南北に細いこの水路は西風の影響をかなり弱めているようだ．風は水道にそって南北に吹くが，想像したほどの強風は吹かない．南へ行く中小船舶には絶好の水路となっている．わが愛すべき「きょうと」号も，波にさからいながらも走っている．メシエル水道の風向と天気の関係は，はっ

きりしている．南風の吹くかぎり，まず大きくはくずれない．北風は悪天候のしるしだ．

やがて，水道は2つに分かれる．右がエスケイプ水道，左がグラップレル水道，その間にサウマレツ島という南北25 km，東西15 kmの三角形状の島が横たわっている．左のグラップレルに入る．このあたりになるとかつての氷河作用で，全体的につるっとしており，上部の傾斜が緩く，下にいくほどきつくなるドーム状の岩山が多くなった．海に面した岩壁に，水平に半円形の彫刻刀でかき削ったような氷河の擦痕もあちこちに見られる．海岸付近は，コイウエの密林だ(図2)．

グラップレル水道に入ってほんの数分後，急にエンジンがとまった．オーバーヒートだ．またやったか！　船長兼操舵手のブンヤは必死に始動をかけてみる．冷却水が上らない．吸水口に藻でもつまったかと思ったが，そうでもない．折しも，もともとあまり良くなかった天気が，急に悪くなった．空が暗くなり，激しい雨をともなった，強い風が吹きだした．ボートが大きく揺れだした．だめだ．岸へ漕ごう．ちょうど，サウマレツ島に，草地のある河口が小さく見えていた．が，風は南西の風で，むかい風だ．ボートはどんどん流される．風の抵抗を弱くするため，ボートのナイロンフードをはずす．雨にまともに打たれながら，3本のかいで必死に漕ぐ．さっきまで，快速の「きょうと」号にご満悦のようすだったホセも一生けん命に漕いでくれる．文明の利器は，いったん機能が停止するとどうしようもなくなる．「きょうと」号の船体は漕ぎやすいようにはできていない．

いっこうに進まない．少なくともそう思えた．ふと，まわりを見る．峡谷状に急傾斜で海まで落ちこむ両岸．目ざす河口以外，どこも接岸できそうもない．人間だけでもはい上れそうなところも，ない．突風．転覆．氷河に近い冷たい海．氷蝕のため，数百mはあろう深い海……．ゾッとして，漕ぐ手を強める．幅約3 kmの水道のどまん中で，風に抗して，同じところを維持してるのにすぎんのではないか．いっそのこと，追い風を利用して，先だってのフィヨルドにもどるべきではないか．が，距離はうんと遠い．焦りと動揺が心をおそう．

図2——ボートが漂流したサウマレツ島付近の景観．氷蝕を受けた岩山が続き，海岸付近のみコイウエ(南極ブナ)の密林が生える．(伊藤(由良)隆氏撮影)

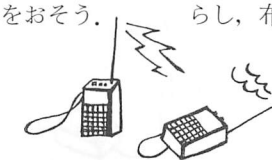
幸いそのうちに雨も小ぶりになり，風もだんだん弱まってきた．午後5時半．やっと，島の小さな入江の奥の河口にたどりついた．助かった．エンジンが故障したのは，たしか2時半頃だった．3時間も漕ぎつづけていたわけだ．ともかく，転覆も漂流もまぬがれた．さっそく，岸辺から少し高くなった草むらをならしてテントを張り，たき火を起した．こんなところに来たやつはぼくたちがはじめてだなどときめつけていたが，よくみると，小屋がけでも作ったのか，1本，朽ちた木のくいが残っている．こんなところに人が，と思って，ホセに「ここに来たことあるのか」ときくと，「シー(ああ)」．プエルト・エデンから50 kmほどしか離れていないこの近辺は，まだアラカルーフにとっては庭のうちなのだろうか．

浜辺には，チョルガが汀付近にびっしりついている．大きいものは15 cmほどの長さもあろう．好きなだけ取って，たき火にほうりこむ．海水が適当な塩味となり，うまい．ほんのり，甘味もある．どれも，肉がいっぱいつまっている．が，あまり大きなものは味がおちる．

夜，テントにもぐり込んだホセはうれしそうだった．黄色いビニロンのテントなど，生まれてはじめてなのだろう．ま新しいテントに，時々パラパラととおり雨の音がいやに大げさに鳴っていた．

ロビンソン・クルーソー

12月19日．晴れたり曇ったり．時おりさっと通り雨が過ぎていく．午前中，エンジンを分解してみる．分解するといってもエンジン台があるわけでもなく，広い平坦地もない．草むらを踏みならし，布シートをしき，その上でばらすのだ．ブ



ンヤ船長は，日本でエンジン分解も修得していた．さっそくお手なみ拝見だ．1つ1つネジをはずし，カバーをとり，シャフトまで抜いてみる．冷却管がつまっているのかと思ったが，そうでもない．残るはエンジンの心臓部，シリンダー部だ．その分解は，こんな野ざらしで何もないところではやれない．応急修理は不可能となった．もうこれで，予定どおり偵察に行くのは完全に破棄せざるをえない．あとは，救援を待つしかない．といっても，いつ来るかわからぬ救援だ．4日分の食糧を8日間食いのばすことにした．いよいよ島流しか．ぼくは，ロビンソン・クルーソーや十五少年漂流記の話を思いだした．そういえば，ロビンソン・クルーソーの舞台はチリ領のファン・フェルナンデス諸島，十五少年漂流記は，このチリ南部諸島内のハノーバー島だときく．ハノーバー島は，このサウマレツ島から南へ約100 kmしか離れていない．漂流記ものを書く作家が世界地図を拡げて，その舞台をさがす時，南米最南部に見える，複雑な諸島はそのイメージとしてピッタリなのだろう．ぼくたちは，それを地でいっているわけだ(図3)．

といっても，悲壮感はない．快適なテントもあり，海岸一面にある貝を食べている限り餓死の心配もない．気がかりといえば，これでまた，予定が遅れたことだ．

トランシーバー交信をするが，まったくダメ．エデンから，基地の無線機で短波放送を流してくれることにもなっていたが，これも，ほとんど受信できない．なるようになれだ．

島の奥へちょっと探検に入る．苔や地衣類が厚く地面に生え，歩くと，ちょうど厚いマットの上を歩くように，はずむ．小高い丘に登り，奥を見ると，小さな湖が森林に囲まれて，静かに横たわっている．川はここから流れ出ているのだ．森林のまわりを，西部劇に出てくるような，テーブル型の岩山がぐるっと囲んで，ひっそりとかくれるような盆地をなしている．この湖を見たのは，ぼくたちがはじめてだ，と思うと，湖畔まで無性に行きたくなる．が，リーダーのジローは，「行ったらあかんぞ」という．湖畔までは，せいぜい20分位しかかからない．

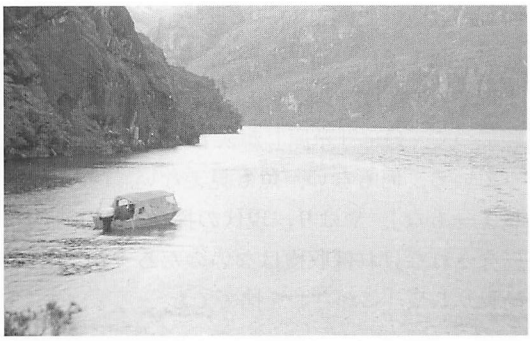


図3——漂着したサウマレツ島の入り江に浮かぶ故障した「きょうと」号．

「もしなんかあったらどないすんね」とジロー．

「あそこまで，見てもなにもなさそうやんか．それに近いし」とぼく．

「行ってる間にむかえが捜しにきてたらどないすんねん」と，またジロー．

「だから，誰かテントに残して，交代で行ったらええやんか」とぼく．

「あかん．行ったらあかんぞ」

こんなつまらぬことでもめるとは．ぼくの頭には，とにかく日本であれほど求めてもえられなかった「人跡未踏」の感覚が，ここではいたるところで得られる．この湖は，ぼくにとって，その感覚を初めて満たすものとしてある．しかも，すぐ手に届くところだ．が，ジローは，リーダーの立場から，救援を待つ身としての「慎み」を主張する．わかる．わかるが．ここは，未知の「宝の山」ではないか．湖畔までいって，なにか「どえらいもの」を発見できる可能性をひめた20分は「慎み」にまさるではないか．予定通り計画を運ぶだけが探検ではなかろう．いや，探検に「予定外の収穫」はつきものだ．

ぼくは，パーティシップにもとる行動を敢えてとった．ジローリーダーが，ブンヤ船長とエンジンを見ているすきに，湖へ向かった．さきの丘からは，蘚苔類はさらに厚く繁茂し，ひざ位まで，ふわっふわっと入り，歩きにくい．盆地の底へと入っていく．まわりを見る．全くの静寂．ぼくの心は高なった．こわい．何かが出てきそうだ．小学生の頃，ぼくの中にあった「探検」のイメージがよみがえる．

熱帯のジャングルを分けて進む．ガサッガサッ．

何かが近づいている．……

が，湖までは，同じような，苔の「草原」と，まばらなひのき(シプレという)の林が続く．湖畔につく．急に「草原」がストンと切れて湖になっている．何もない．魚も見えない．「なんや，しょーもな」．やはり，現代の探検は「計画的」になされなければ収穫はないのだろうか．「心の高鳴り」や「こわさ」を捨てても．

ホセ・トンコ

12月20日．今日もまた，待ちぼうけだ．1日中，たき火のまわりで雑談しながらひまをつぶす．時々，入江の外のグラップレル水道を見ながら．

アラカルーフのホセ・トンコは，終始だまって火にあたっている．どす黒い，深いしわの入った顔．大きな目玉．いかにも善良そうな，笑いの表情がいつも漂っている．古びた黒い鳥打ち帽がよく似あう．年は，自称40歳．

彼は，このフィヨルド，諸島地帯の水路をくまなく知っている．ふだんは，小さな木製カヌーで，魚貝類や，毛皮獣を求めて，犬を道づれに放浪している．家は，プエルト・エデンの，空軍ポストの前にある．家族は奥さんと6人の子供がいる．奥さんは，今，プンタ・アレナスの療養所へ，結核の治療に送られている．小さな子供たちの面倒は，長女のフリアナ(15歳)がみている．

ホセは，エデンに住むアラカルーフの中でも，もっとも善良で，おとなしく，空軍のポストの人たちの信頼もあつい．まったく，おとなしい．というより，ほとんど口をきかない．ボートに乗って，ブンヤ船長が，しきりに，ここはこっちに行くのか，あっちか，などときいても，「シー(そうだ)」か「ノー(ちがう)」でしか返事しない．が，水先案内人としても，エデンの中では最優秀のひとりだ．

1962～63年に，この国のガルシアやマラングニッチら6名が，エクスマウス・フィヨルドから，パタゴニア南氷陸に上がり，氷河学や地質学の調査をして引き返した．この時もホセは水先案内人として雇われた．その時，ガルシアからもらったという，古びた登山靴を，今度もはいてきていた*1．

たき火のそばで，ただ黙って，時々ふっと消えたかと思うと，たき木用に，大きな枯木をかついで戻ってくる．誰も話しかけようとしないからかと思い，少し話しかけてみる．が，返答は，もっとも簡単に，1つの単語で返ってくるだけだ．

その彼が，突然立ちあがり，大声で奇怪なさけび声をあげた．眼は沖の方を見ている．見ると，2人乗ったカヌーが，小さく黒く見えている．ぼくたちも大声をあげる．エデンへ帰るところに違いない．ゆっくりゆっくり，入江の入口付近を横ぎり，やがて島かげに隠れてしまった．気がつかなかったのか．が，とにかくホセの目は，さすがに早い．

その後，3月初め，ぼくたちがプエルト・エデンを後にする直前，ホセの家へ行ってみた．ホセはいなかった．父も母もいない留守をまもっているフリアナにきいても，どこに行ったか，いつ帰ってくるかも知らないという．放浪の民，アラカルーフに，そんな質問は無意味だったのかもしれない．

救援隊来る

12月21日．午後4時頃，やっと救援隊のボートが見えた．プラクティカンテのファン，寺本巌隊員とエデンの漁師が1人．トランシーバーを入れる．「君たちはいったい何をしていたんですか」と，寺本氏の奇妙なしかし，詰めよるような質問．とにかく，再会を喜び合う．さっそく，装備を撤収したが，問題はボートだ．5mの「きょうと」号をいかに運ぶか．引っぱっていこうというと，ファンが反対する．救援に来た空軍のボートは，大きいが遅い．引っぱればますます遅くなる．そこで，このボートの上に，直角の向きに積んだ．なんとも不安定なかっこうだが，仕方がない．「親がめの上に子がめを乗せて……」というやつだ．

エデンには，午後8時頃，無事ついた．

*1 彼の水先案内料は，一航海50エスクードだった．1日いくらではなく，1度海に出てから，帰ってくるまでが単位だ．10日になろうが，20日になろうが，そんなことは関係がないわけである．

悲しきエンジン

12月22日．問題の，ジョンソン40馬力のエンジンの完全分解をやる．ブンヤ船長と，電気技師の寺本隊員の，慎重きわまる作業により，1つ1つ部品がはずされる．最後の，シリンダー部があけられる．

パッと開けたとたん「あちゃーっ」．やっと故障の原因がわかった．シリンダー室にそって走る冷却管と，シリンダー室の間の壁の鉄が欠けて，冷却管と通じているではないか．わずかにそれを防いでいたガスケットも，こげてボロボロになっている．冷却水がシリンダー室に入っていたわけだ．エンジンを取りかえる以外，どうしようもない．ただ，応急修理としては，新しいガスケットと取りかえることだ．といっても，ガスケットなど予備は持ってきてない．頼んで送ってもらう以外ない．所長のトロー氏に相談すると，さっそく，プンタ・アレナスにいる奥さんに無線連絡してくれた．が，ガスケットは，サンチャゴの代理店にもなく，アメリカからはるばる送ってもらわねばならぬという．さらに，月に1度船が通るか通らないかという，このエデンに着くのはいつ頃になることか．

「きょうと」号による行動はあきらめざるをえなくなった．日本での準備中も，もっとも金と時間をかけ，このプエルト・エデンまでの輸送でも一番頭を悩ませた「きょうと」号とエンジンが，数時間だけ活やくしてダメになるとは．ぼくたちのショックは大きかった．とくに，ずっとボートにかかりきっていたブンヤはがっくりきていた．船外エンジンでは世界に名をはせる「有名メーカー」の製品なのに，まさかと思うような，恐らく万に一つぐらいの欠陥品をつかまされたわけだ．日本でもっとならし運転をやっておれば，また，専門家がいれば，エンジンの音で，気がついていたかもしれない．が，あの，募金や装備調達に忙しい中で，ボートを扱うアマチュアとしてやれるだけのことはやったではないか．ぐちはよそう．空軍のボートや，神父のボート等を頼ることを考えて計画たてなおしだ．

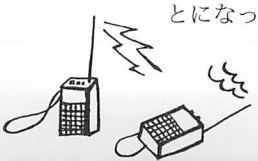
計画変更

「きょうと」号がダメになったので，偵察は，あと1回だけにしなければならない．できれば，同時に，いくらかの装備も運んで，デポ(ある地点に集積しておくこと)しておきたい．ここで，上陸できぬ可能性の大きいピオ11世氷河はやめて，エイレ・フィヨルドから分かれているファルコン・フィヨルドに目標を変えたほうがいいのではないかという声がでた．ファルコンには，いくつかの氷河が海に流れでており，中でもHPS 12番氷河は大きい．氷河観測には，ピオ11世氷河のように馬鹿でかい氷河より，小さい氷河の方が適していると，氷河担当のジローも言う．航空写真で見ても，上陸できそうだ．中島隊長は，ぼくたち学生3人にきいた．

「ピオ11世へ行こうとプランをたてたのは君たちだ．そう簡単に目標を変更しようとすることに抵抗はないか」．

抵抗は，ある．しかし，考えてみれば，どうしてもピオ11世でなければ，という根拠はない．チリ・パタゴニアの，未知なる氷河地帯ならどこだっていいのだ．奥深いことなら，ファルコンも，ピオ11世氷河も同じだ．ひかれたのは，氷河の壮大さだけだ．

純粋の登山でもない，学者がつくりだした学術調査でもない，学生探検のあいまいさがここにある．ぼくたちの遠征隊は，はっきりと学術調査を目的としている．氷河地帯では，氷河と気象の観測だ．チリ・パタゴニアの特殊な気象条件での氷河の状態を認識するために不可欠な仕事だ．まだ，だれもやっていない．それ自体，大きなパイオニア・ワークとなりうる．が，中島隊長は，遠征の計画主体たるぼくたちの思わくを重んじて，あえて，観測，調査を至上命令とはしない．ところが，ぼくたちのあいまいさにあって当惑する．

「君ら，いったい何がしたいんや」となる．何だろう．しいていえば，「何でもやってやろう」か．

ピオ11世方面は，行けたら行くということにし，ファルコン・フィヨルドの氷河に変更することになった．